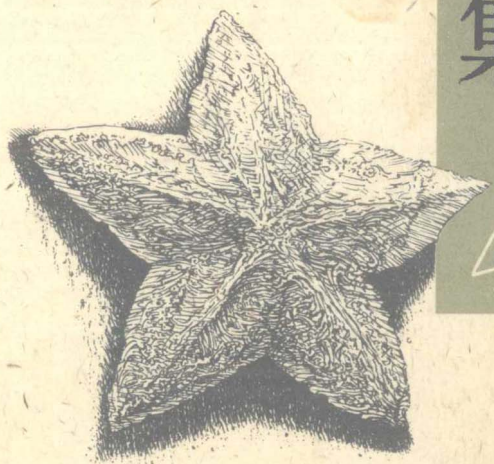


加賀乙彦
短篇小説
全集
4



残花

残花

加賀乙彦
短篇小説

全集
4



潮出版社

残花

加賀乙彦短篇小説全集 4

一九八四年十月二十五日 印刷
一九八四年十一月十日 発行

定価一四〇〇円

著者 加賀乙彦

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

郵便番号

東京都千代田区飯田橋三ノ一ノ三 一〇二

販売部 (03) 三三〇七四二

電話 編集部 (03) 三三〇七八一

振替 東京五一六一〇九〇

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

目
次

砂上——7

雪の宿——45

残花——75

大狐——101

ある歌人の遺書——119

池——131

冬の海——151

暗い雨——175

子守歌——193

ドストエフスキイ博物館——201

ヤスナヤ・ポリヤーナの秋——225

*

『宣告』の頃——61

*

解説 金子昌夫——113

装丁
装画

菊地信義
柄沢齊

残

花

加賀乙彦短編小説全集IV

砂

上

金曜日

朝、牛乳をとり、倉庫に行く途中、ミスターSに会った。軍服を着て、自慢の口髭を陽にきらめかし、カンガルーのように気取って歩いてきた。メイドがいつもミスKに言う発音と抑揚を真似てグッド・モーニングと挨拶した。ところが彼は、目で目も動かさないのだ。完全にぼくを無視してさっさと行ってしまふ。癪にさわったからもう一度大声でグッド・モーニングと、叫んでみた。彼は歩度を乱さず、長身にさらにながら影をひきずらせながら行ってしまった。

相変らず暑い。キッチンでは十一時に三十二度になった。メイドがレモネードをもらいに来たら、コックがいやみを言った。レモネードはミスKのため特別に注文して冷やしてあるので、メイドの身分では贅沢だという。メイドも負けていず、ミスKはレモネードが嫌い、ジンジャー・

エールしか飲まないと言いつ返した。女二人の言い合いでなおのこと室内は暑苦しい。むろんぼくは中立で両方に笑顔をむけ、むきになってゐる女たちを交互に見ていた。

夕方、事務所から戻つて来たミスKがさわぎたてた。カナリアが死んでゐるといふ。この暑さでまいったのだ。ミスKの部屋にはクーラーがあるのだから、カナリアのために出勤中も冷房してやればよかつたのだ。朝ぼくは水も餌もやつたし、風通しをよくするため窓も少しあけておいたのだからむろん責任はないが、ミスKに叱られて機嫌を害したメイドの叱責を黙つて受入れてやつた。

常に微笑を絶やさぬこと。たとえ瞬間でも微笑が絶えたことを相手に気どられぬこと。

決して怒らぬこと。怒りたいときにこそ微笑を顔に貼り付けるべきだ。ぼくは朝ミスターSに叫んだことを後悔しだした。ぼくの無礼はすぐさまメイドに告げ口されるだろう。何しろ彼はメイドの当座の恋人だ。そういうことになっている。なつてゐる以上は慎まねばならぬ。或る日メイドに奇妙な調子で言われた。狐の鳴き声というのは聞いたことがないがそれは狐の鳴き声と形容したくなる奇妙な調子だった。

「あんだ、ミスKをあんな目で見ちゃいけないわ」

「あんな目ってどんな目です」

「ずばり言えば色情狂の目よ。女にはすぐわかるの」

「ぼくにはわかりません」

「しらばっくれなくなつていいわよ。あんた、ミスKがおでかけの時には必ず窓から見るじゃない。いつか道であつたら立止つたじゃない」

「わかりません」

「ばかね、自分のことがわからないなんて」

「すみません」

「だけど本当なのだ。メイドはぼくの目の本当を言い当てたのだ。なにしろ、ミスKは美人だ。そういうことになっている。そういうことになっている美人をよく見るのは美人とは何かを知りたいからだ。ぼくだって男だ。ぼくにとってミスKはちよつとした美人ではある。」

ミスKは三十歳を越えてるだろう。西洋の女の年齢はわかりにくいだが、メイドの話ではそうだ。自分より五つぐらい上だと言って、そいつは自分の若さを誇示するためなのだが、ぼくがコックからメイドの年をきいてることは知らない。「メイドは少女みたいな可憐なふりしてミスターSにすがりついてるけどあれで二十六で、もうそろそろオールド・ミスになりはじめなのさ」

ミスKは美人だとメイドもコックも言う。金というのか象牙色というのか知らぬが、まるで色素の薄い長い髪で、野原の若草のように頭を覆い、ジャガーそっくりの丸い、少し目尻の上つた目でにらむ。そう、いつもにらんでいる。少し笑ってくれると目尻の皺なんかわかるのだが、このジャガー娘はにらんだような表情を動かさないので、いつもにらんでいるように見える。そん

なところが美人たる要件かな。

いや、ぼくが認めるのは顔じゃない。脚だ。とにかく長くて、まっすぐで、ふくよかで、あの真白な脚を見ていると亢奮してくる。強姦したいような脚なんだ。

顔は見ないにかぎる。脚だけをよく見るべきだ。御出勤姿を後から眺めている「色情狂」の目というわけだ。

鏡で自分の目を調べてみた。日本人としては割合大きな目で、もちろん、メイドの細い目やコックの小さい目より表情に富み、少年兵のとき、この目のため上級生から稚児あつかいされたのだが、さて色情狂とはどんな目か。

微笑の練習をした。驚いたとき、不愉快なとき、睡いときの微笑。相手を嘲笑するとき、尊敬するとき、強姦したいと思うときの微笑。

鏡の中に十七歳の男の子がいて、こちらへ頬笑みを見せている。やあ、きみ、顔だけは子供じみているね。しかしぼくの心は老人だ。戦争に敗けてからこの一年で二十歳以上は年をとった気がする。コックが三十五だから、彼女より年上の気持だ。

年寄の笑、それが微笑だ。

夜だ。暑い。いちど睡ろうとしたのに再び起きあがって日記帳を取出した。メイドやコックに見られぬよう、トランクに入れて鍵をしめてある。それをわざわざ取出した以上、また何か書き

加えねばならぬ。

机はトランク、腰掛はベッド。小さな裸電球が四周の壁に迫られた空間を、何だか塞き止められたような感じの光で照らしている。光は走行距離が短く、壁に鋭く突きあたると弾ねかえり、鋭いままでもノートに落ちる。ノートがぎらぎらしてぼくの目を痛める。そのぎらぎらを塗りつぶすように、それに復讐するような気持でペンを動かしている。

汗が一つ、三つも落ちた。その部分だけ字がにじむ。またもう二つ。暑いのだ。

風がまったく通らない。船室のような丸窓が高いところに一つだけでは、密室とかわらない。ついさっきまでむかいのシャワー室で音がしていたのが静かになった。コックとメイドがすんだらぼくが使つてよいことになっている。ひとつシャワーでも浴びるか。

目を覚ました。あまりにも暑いので、眠りが浅いのだ。疲れているし、睡いのに、そんな脳を熱気が刺戟する。シャワーも浴びぬうちに、また汗をかいたので体の皮膚が粘着性の強い塩の糊で塗りたくられたようにぬめる。ぬめぬめとぼくはのたうっている。

誰かの気配がする。丸窓からのぞいてみた。メイドの部屋に明りがついていてささやき声が洩れてくる。メイドと、もう一人はミスターSだ。カンガルーのように気取った歩き方の紳士。やつぱり気取つて睦言をいつてるのだろう。

ミスターSの膝の上にメイドが抱かれている。襟巻の狐のように硝子の目玉をキラキラさせ、本当に襟巻のようにだらりと伸びて。しかし得意の英語で抜け目なく応答しつつ。メイドの小柄

だが形のよい女体が目に浮ぶ。そんな具合の気配がする。

朝、二階へ掃除に行くときがぼくは好きだ。階段を登りながら、先へいくメイドの太腿がよく見えるからだ。ミスターSが撫でさすった太腿だと思うと大層なまめかしい。

メイドは、ぼくよりちよど十としうえのおばさまだが、若造りで二十ぐらいにみせて、派手なスーツを着、ミスターSは十七、八の小娘を抱いてると思ってる。贈物のブローチやイヤリングなんか、デイズニーの漫画なんか嵌め込んである子供用なのだ。

話声は続いている。温気に融けた飴のように、ねっとりとした声が耳にとどく。

こんどこそシャワーを浴びよう。

土曜日

夜。暑くって寝苦しい。さっきシャワーを浴びたのにもう汗みずくだ。ふやけた人肌のような空気には体の中の水分を誘い出す魔力があるかのよう。敷布がぼくの体の形に濡れてしまった。

夕方、部屋にこもって気を入れた。ミスKの脚を、卑猥な姿勢にしたと想いながら行為をおわった。おわる直前、誰かが壁越しの便所に入り、排尿の具合でメイドとわかり、彼女が身近にすることが局所へ熱く柔かく伝わるようで気持がよかった。少くとも今日の行為の完成にはメイドの力があずかっている。

夕食のとき、ぼくがメイドに微笑をいつもより沢山提供したのはそのせいだ。感謝の気持をあらわしたのだ。